**会津藩校日新館 / 什の掟・日新館の教え**

会津武士は、その勇敢さと強い道徳律で日本中で知られていました。その理由として不可欠なのが、会津藩の武士の息子たちのための訓練システムの中心として1803年に設立された日新館でした。日新館は当時の教育機関の代表格とされ、会津流を熱心に学ぼうとする他藩の武士の訪問も受け入れました。

約26,500平方メートルの学校は鶴ヶ城に隣接していましたが、戊辰戦争(1868–1869) で破壊されました。 1987年に10キロ離れた新しい場所に、元のデザインと規模で忠実に再現され、訪問者に公開されています。詳細なジオラマや学生生活の再現を通して、修行武士の日常を知ることができます。ハイライトには、武道場、日本最古のプール、学生が天文学について学んだ天文台などがあります。

男子は通常、6歳から9歳の間に予備クラスに参加した後、10歳からこの学校に入学しました。彼らは階級を上げていき、10代後半で卒業しました。生徒たちは、精神的、肉体的、精神的に、領主と地域社会に奉仕する人生を準備するための総合的な教育を受けました。他者を尊重し、自分の行動に責任を持つなど、トレーニングの基本原則は、今日でも教育的価値に反映されています。

**高い理想と一流の設備**

江戸時代 (1603 ～ 1867年) に日本の生活が比較的平和になると、指導者たちは基準と行動の緩和に懸念を持ち始めました。大名松平容頌（1744–1805）の治世中、彼の主任顧問である田中玄宰は、次世代の教育をより重視することを提案しました。裕福な呉服商が日新館を建設するための資金のほとんどを提供し、1803年の開館に至るまでの5年間の建設期間中、役人、教授、学生を含むコミュニティのメンバーが協力して働きました。

武士階級の男子たちは10歳から日新館に入学し、1,000人から1,300人の学生が常に入学しました。彼らの1日は午前8時から始まり、少年たちは年齢や学年に応じて、読書、書道、倫理、礼儀作法、宗教、天文学、さらには生理学まで、幅広い教科を学びました。学業で優秀な成績を収めた者は、裕福な家庭の長男とともに、学校の大学部門に進むことができました。

すべての生徒と教師は、日本で最初の給食 (学校給食) の例である、簡素でありながら充実した昼食を提供されました。これが全国の公立小中学校で栄養満点の炊き出し給食を提供する近代給食制度の先駆けとなりました。日新館の学生たちは、学校のプールに相当する水練水馬池で、剣術、弓術、乗馬、水泳の練習をしました。実践的な練習の中には、重い鎧を着て馬に乗って川を渡る方法がありました。

生徒たちは、必要な場合に剣で命を絶つ方法も教えられました。日新館の生徒でもあった白虎隊の19人の隊員は、1868 年の会津の戦いの最中の飯盛山で、訓練のこの側面を利用し、敵軍に捕らえられるのではなく、自ら命を絶ちました。

年齢や学年に関係なく、すべての生徒は武士の息子として理想的であることを維持する必要がありました。これらには、大人と年長の学生を敬意を持って扱うこと、外見と話し方に気を配ること、公共の場で常に適切に行動することが含まれます。

**武士の子弟の掟**

日新館に入学するまでの6歳から9歳までの男の子は近所の講座に通っていました。彼らは10人で一つのグループとして編成され、子供たちはお互いの行動を監視し、統制することを助け合いました。日新館での修行に備えて、彼らは次の「武士の子供の規則」（十の掟）に従って生活することが期待されていました。

・年長者に従いなさい。

・年長者にお辞儀をしなさい。

・ 嘘をついてはいけません。

・卑怯な振る舞いをしてはいけません。

・自分より弱い人をいじめてはいけません。

・路上で食べてはいけません。

・家の外で女性と話してはいけません （これは、家族以外の少女や女性との交流を思いとどまらせるためでした。）

・なにより：してはいけないことはしてはいけません。

少年がこれらの規則のいずれかを破ったと思われる場合、彼は教師や仲間の前に呼び出され、彼についての弁明をしました。その後、罰を決定するのはグループ全体でした。最も厳しい罰は一時的な排除であり、武士の集団志向の文化では非常に恥ずべきことと見なされていました。幼い頃からのこの規則と自治のシステムは、少年たちが共に働き、他の人を尊重し、グループ全体のニーズを考慮することを奨励しました。 「家の外で女性と話すな」という例外を除いて、これらのルールは今でも会津若松の学童に教育の中核として教えられています。

日新館の施設を見学した後、訪問者は弓道や茶道などの少年たちが学んだいくつかの科目を体験学習したり、会津の伝統的な縁起物である赤べこ (赤い牛) の絵付けをすることができます。